年が明けて、初回のコラムとなります。2025 シーズンもトラックエンジニアとして NAKAJIMA RACING の SUPER GT と SUPER FORMULA 64 号車を担当します。今シーズンもよろしくお願いします。

さて今回は、これまでのコラムから少し方向転換して、私のレース好き遍歴から話を広げてみようと思います。

私が四輪レースに興味を持ったきっかけは、小学生の時に出会った「グランツーリスモ」というゲームでした。クルマのスタイリングに興味があった私は、そこでレーシングカーの”形”にのめり込みます。今でも続けているクルマの創作スケッチもこの頃始めました。そして、実車を初めて見たのは 1997 年の F1 日本グランプリの時です(私は当時中学生でした)。F1 が好きな父に連れられて鈴鹿の 1 コーナースタンドで目にした最初の衝撃は今でも忘れません。それは、朝のフリー走行で一番にコースインしてきたベネトンプレイライフのアレキサンダーブルツ選手でした。音で振動する観客席、迫力でバスのような大きさに見えるマシン、まるで昨日の事のように思い出します。

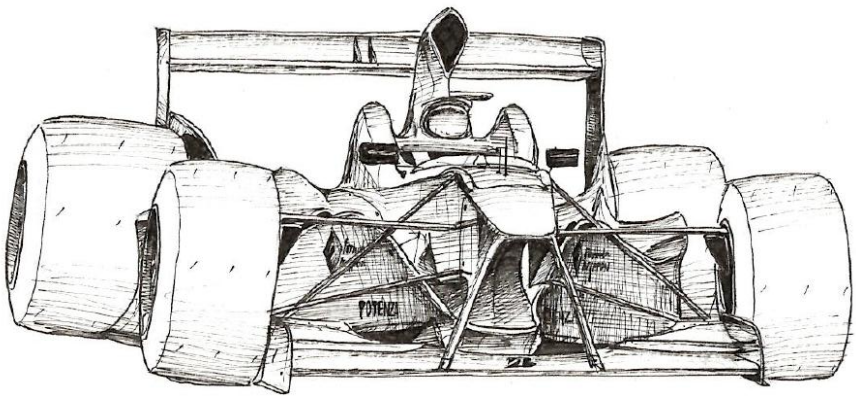

図.2011 年に創作した Formula NIPPON シャシーのイラスト。
ワンメイクならば、よりスタイリングも音も恰好良くあって欲しい。

私が世の人に知ってほしいモータースポーツの一番の醍醐味は、レーシングカーの純粋な”凄さ”。高校時代に読んだ「F1 地上の夢」という本の中に、心に残っている一節があります。ホンダ F1 第 2 期、桜井淑敏さんの回顧として筆者が書いている言葉で、「桜井淑敏はピケの最後の数周の走りを見つめた。そのうち胸のふるえがとまらなく

なった。（※中略）ピケの車はモンツァの最終コーナーからあらわれるとき、エンジンの巨大なパワーのために車体が小刻みにふらつき、それから態勢が立ち直ったかと思うと一直線にピットの前を爆音とともに走り去っていった。（※中略）まるで生き物のようだと彼は思った」。私にとっての 1997 年 F1 日本グランプリでのあの光景は、その欠片だったのでしょう（小刻みにふらつく前にノックアウトされましたが…)。

更にもう一つの魅力的な要素は”自分達が作ったクルマ、組織で勝負する”という醍醐味です。

・人と違うクルマで戦う
(最高速だけに拘ったセカテバプジョー、FR に拘ったパノスのような。ライフおじさんの W 型エンジンもそうですよね)
・同志の力でライバルと戦う
(フランスに拘ったプロストチーム、日本のスーパーアグリ F1 チームのような)
といった具合に様々な個性のあるチームが一堂に会し、ただ一つの頂点を目指すことが、人を惹き付けるスポーツを作っているのではないでしょうか？

NAKAJIMA RACING が住友ゴムさんとタッグを組み SUPER GT に参戦しているのはまさに自分達自身のモノづくりで勝つ為の挑戦です。しかもライバルは言うまでもなくタイヤメーカーとしてこれ以上ない素晴らしい企業ばかりです。世界でも希少な ”タイヤ戦争”に挑戦しているのです。このようにレーシングカーの純粋な凄さ、個性際立つそれぞれの挑戦が合わさって、素晴らしいスポーツが出来上がっているのだと思います。そんなチームの前線に立ち、日々携われている事を私は誇りに思います。

今後もこのコラムを通して、モータースポーツの魅力の発信の一助になればと思います。
では次回も不定期に更新していきます！